

## ■高岡まちっこプロジェクト

2012年8月 住宅ビルダー、漆器卸業者、銀行員、不動産鑑定士といった本業を持つメンバーで「空き家を使ってまちなか居住推進」について考える会として高岡まちっこプロジェクトは立ち上がった。

なぜこの会ができたか？という点、日本中この地方都市もが抱える問題。「少子高齢化」と「空き家増加」この問題について調査した。

高岡の少子高齢化の現象は近隣の市とは違うものであった。18歳から22歳の人口が他市は減るのに対して、高岡市は減っていない。22歳以降に人口が減ってしまふ。18歳とは高校生が大学に行くタイミング。高岡市には2つの大学があるため減った人数分、他市、他県より人口が流入している。そして、22歳に卒業するとき高岡から出ていくことで、22歳以降に減少していることがわかる。

た。まずは、「まちなかに住まうとは？」「高岡らしい住まいとは？」2チームに分かれて話し合いをしてみよう。くまさんチームとうさぎさんチーム。どちらのチームからも出てきた答えは、「できればまちなかに暮らしたい。」「学校がまちなかにあつたら良かったのに。」「高岡は冬になったら雷が多いから、皆でキーキー言いながら住みたい。」など、私たちには思いもつかない意見が出てくる。「高岡の人は何でも学生に恵んでくれてやさしい。」とか・・・。

第2回目は2012年12月12日に実際の空き家を見て現状を知った。「この建物をシェアハウスにしたらどうだろう？」の問いに、「いいと思う。楽しそう。」との意見。

第3回目は2012年12月19日に「理想の高岡型シェアハウスとは？」というお題で話し合った。3回目には、大人も学生も話し合いのなかでコミュニケーションが成立し、お互いに多くの意見を得ることができた。

1月には2チームのプレゼン発表会を開催した。2チームの意見が出てきたのは「アトリエとギャラリーが欲しい。」ということであった。まちっこシェアハウスには、アトリエと1階のカフェにギャラリーを設けた。

この、22歳人口の流出を少しでも抑えられたら、人口増加につながると考えた。その他に、空き家の数も問題となっていた。高岡市内の特にまちなかと言われている地域に年々増え続けている。この空き家も何かに利用できないか？と考えた。

そこで一つの案が生まれた。空き家を使って大学生が住むシェアハウスとギャラリーを作れば、大学生がもしかしたら高岡を気にいつて残ってくれるのではないかと仮想案を出した。しかし、私たちの考えは、20歳以上離れた大人の考えである。学生たちに聞いてみないとわからないという思いから、富山大学芸術文化学部 of 学生さん10数名を集めて、意見を聞くためのワークショップを始めた。

## ■学生の意見を聞くワークショップ

2012年11月30日に1回目のワークショップを始め



写真1：一番最初のワークショップ

このように、私たちはプロジェクトを動かすときには、自分たちの意見だけで動くのではなく、多くの人の意見を聞いて取り入れることが、最終的には必要としている人に必要なものを提供することができることを学んだ。

### ■まちあるきワークショップ

1つのプロジェクトが終わってから、新たにどの物件で何をするか考えて空き家を物色しながら歩くことをしていた。何度も歩いたり見たりしたことをネット上に上げていくと、多くの方から自分たちも歩きたいと声が聞こえてくる。

そこで、5月25日に空き家めぐりまちあるきツアーをすることをfacebookでイベントを立てたところ40人くらいの方からの応募があり、大の大人が40人連なって高岡のまちなかを歩いた。

まちあるきをして現状を知った後にワークショップをした。「こんなに空き家があるって知らなかった。」「将来もっと少子高齢化が進んでまちはどうなるんだろう?」「自分のまちには小学生が2人しかいない。」「一方通行がこんなにあるなんて知らなかった。」いろいろな

ことに決まってからは、間取り、金額などを話し合い、視察に行つて開業までの段取りをみんなで考え行動した。

### ■小杉さんちワークショップ

まちっこの話題は新幹線開業や空き家問題がクローズアップされるなか、新聞やテレビで多く取り上げられるようになった。そのおかげで、空き家オーナーさまから依頼が来る。

「自分の持っている空き家も何とかしてほしい。」と言つてこられたのは、現在アメリカに住んでいる小杉さん。その空き家は150坪という大きな空き家で部屋の数も10部屋以上で蔵もある。

このころには、ワークショップがまちづくりや空き家活用に有効ということが分かっていたので、自治会の方や行政の方、多くの空き家に関心のある方、老若男女でワークショップを開催した。

いろんな意見が飛び交った。「シニアのコミュニティセンター」「学童」「塾」「シェアハウス」「劇場」などの意見も明日の行動に移せそうな意見であった。

しかし、この家に住んでいた小杉さんのお姉さんが、「この家を何かに使うのなら、手を加えてないこの状態

気がきが生まれた。

そこから新たな動きもでてきた。「自分のまちでも現状を知るワークショップがしたい!」「道が狭いので防災について話し合いたい!」「自分もっている空き家を何とかしたい!」

### ■ゲストハウスワークショップ

前回のまちあるきの結果、次の空き家物件が選ばれた。まちなかのウナギの寢床で、奥に蔵がある高岡にはありがたい物件である。まずは、学生からの案でお掃除プロジェクトを開催。そこから、ごみと使えそうなものを分別。使えそうなものは、蚤の市を開催することにした。すべて完売した。

その後、「この建物をどんな風に使おうと人口推進できるのか?」など意見交換しながら幾度もワークショップを開催した。その都度参加者も変わり、かなり多くの意見が飛び交った。「カフェ」「コミュニティスペース」「シェアハウス」「ゲストハウス」「移住の人のための住宅」「アートギャラリー」「アトリエ」。

最終的に、多くの人に高岡の家を体験してもらえ、ゲストハウスに意見がまとまった。ゲストハウスにする



写真2:小杉さんちワークショップ

を映画に残しておきたい。」という強い思いから、自主制作の映画化することになる。

監督を探すも、なかなか見積金額が折り合わない。そこで、まちっこプロジェクトの人脈から高岡で映画のプロデューサーをしている上野さんに予算を言って相談する。俳優を素人とするなどして、いろんな削減案をもらい、撮影することになる。

2016年夏に撮影して、編集、完成は2017年夏になった。この映画は、お姉さんの想いの通り、家が主役の映画となった。多くの人が住んでいたその家が、今は空き家になっている。その空き家が見てきたことを語る・・・。

Lost and found

### ■COMMA, COFFEE STAND オープン前ワークショップ

山町筋という高岡には歴史と文化がある街並みがある。その一角にパン屋さんだった建物が空き家になっている。この空き家でカフェをしようと東京からUターンで帰ってこられた大菅さん。もともと高岡出身であった大菅さんだからこそ、地域の人に本当の意味で喜ばれるカフェをオープンしたかった。

このワークショップの技法は会社の会議などでも有効なのを知っていたオーナーは、自分の会社の社員の教育も兼ねて、ファシリテーター育成とワークショップの依頼をされる。

ファシリテーターとはなにか？ 集団活動に参加せず、あくまでも中立的な立場から活動の支援をする人。会議を行う場合は、自分の意見を述べたり、自らの意思決定をすることはしない。議事進行とセッティングをする。客観的な立場から適切なサポートを行い、集団のメンバーに主体性を持たせることができる。

3回のワークショップをするのだが、その都度ファシリテーターの育成教育をする。最初の1回目、塩谷本社にて社員や銀行員やまちっこメンバーが集まって、4グループに分かれて1グループ4から5人くらいで話し合いをする。まずは、ファシリテーターなしで話をしてみよう。次に、一人がファシリテーターありで話してもらう。全員にどちらが話しやすかったかを聞いたところ、ファシリテーターがいたほうが話しやすいと全員一致した。そこで、重要性がわかり、自分たちが本番のワークショップでファシリテーターになることができた。

3回のワークショップが終わって、発表会も開催。参

「ここにどんなカフェがあったら地域の人たちに喜ばれるだろう?」「私たち考えているカフェは受け入れてもらえるのだろうか?」

そんな思いから始まったワークショップには、町内の方をメインに始まった。

「どんなメニューがあったらいいですか?」「どんなお店だったらいいですか?」

このワークショップは合意形成ができるとても有効な手段である。ここにカフェができるということを伝えるオーナー側。町の人は情報を得ることができ、自分たちの意見も言える。カフェの運営に携わった感も生まれる。

### ■塩谷ビルの使い方を考えよう

1973年に建設されたテナントビルが坂下町にある。当時は満室だったこのビルも、いまでは空室が目立つ。ビルオーナーとしては、満室にしたい。しかし、こちらからの押し付けになるビルにはしたくない。「町の皆が喜ぶようなビルになるにはどうしたらいいのだろうか?」という思いから、ワークショップをすることになる。



写真3：発表会

加してくださった方は80名近く。塩谷建設の社員、富山大学芸術文化学部の学生、高岡法科大学の学生、銀行員、行政、個人経営者、主婦など、いろんな角度からの意見を活発に交換できて一枚の大判の用紙にまとめられたのも、ファシリテーター教育ができたからだと確信している。

塩谷ビルは、2016年にレストランとシェアハウスとして使われている。

### ■子供の未来応援ワークショップ

2016年2月にNPO法人くろみさんから、貧困家庭の子供たちを応援するために自分たちができることを考えるワークショップをしたいと依頼がある。「貧困家庭とは?」「日本に貧困ってあるのだろうか?」と不思議な気持ちだった。

私だけが感じることはないだろうと考え、まずは日本のひいては高岡の貧困家庭の現実を知るところから始める。貧困という言葉の中にはいろんな意味が含まれていることを知る。実際にお金に困っているという現実だけではなく、親が子供を放置して働いていたり、遊んでいたり。学校の勉強だけではなく、社会勉強も教えても

らっていない子供が多い。

この現状を知って60名ほどの参加者が4から5人のグループになってワークショップをする。このワークショップは、子供の未来応援のために誰かが動き出すということを目指して始まった。3か月にわたりワークショップをした。お金や物を与えるためだけでは本当の支援にはならない。「生きる力をつけること、自立させることが本当の支援になるのでは?」という1つの答えに結び付いた。そこで、私はこのワークショップのゴールの行動をするべく、ファシリテーターの吉谷奈艶子と一緒に6月に株式会社ル・ソレイユという子供の未来応援のための会社を立ち上げることになる。子供だけではなく、人の自立を促すための会社である。最初に決めたゴールに到達するのもワークショップの醍醐味である。

### ■山町ヴァレー 株式会社町衆高岡

2016年8月、株式会社町衆高岡が設立された。山町ヴァレーの運営会社として、7名の取締役ににより結成された。

山町ヴァレーとは?高岡商人のまち山町で、文具商を営んでいた谷道家を改修して新たな高岡のコミュニ

ティースポットとして8つのテナントスペースがある施設である。2016年11月より改修工事に入るのだが、その前に元々地元の人たちでまちづくりが行われてきた場所である。地元の人たちを無視して、「コミュニティスペースをつくりました。さあ一緒に使いましょー!」では、コミュニケーションなしのコミュニティスペースで、結局誰も使われないまま放置されるのである。

ここでも、ワークショップがキーワードになる。山町の人達と町衆高岡の役員、さらには新しい所有者と一緒に、「どんな場所になったらいいか?」「自分たちがこの場所を使うときはどんなことがあれば使えるか?」「ディスプレイーションをする。その結果、山町のみながこの施設を通じて商売をしたり、山町の歴史が残せたり、山町全体で盛り上げれば良いという意見になった。

この意見をもとに山町ヴァレーにいるコンシェルジュ(お客様相談係)は山町の住民が就業していたり、山町の井戸端会議というところで、山町の人の話を聞きながらお菓子をいただいたり、正月には餅つきをしたり書初めをしたり、日本の文化・高岡の文化を楽しんだ。



写真5:ほんまちの家

## ■終わりに

ワークシヨップはまちづくりに重要な手法だと私は理解する。まちづくりは、人と人がつながってこそ大きな力が生まれる。その力を生むためには、人の話を聞くことが大事である。人は、相手が考えていることはわからない。家族ですら、わからない。少し聞いて妄想して勝手に思い込む。これが人の思考だ。

しかし、深くまで聴くと妄想して思い込むことはない。相手の考えを知ることができる。聴いたあと、自分の考えと違っていたら否定言葉を言ってしまうところだが、ワークシヨップでは絶対に否定してはいけない。違う意見として相手に伝える。これによって、気持ちよく自分の意見が言え、その対話の中で合意形成がおこなわれていく。いつの間にか地域の課題が解決して、皆仲良くまちづくりができるようになる。これからも、いろんな場にいる人とワークシヨップをしながらまちづくりしていく所存だ。